



## 院内体制の構築

このシーンに参加するスタッフは…

主治医，看護師，臨床心理士，患者・家族ケアチーム，臓器提供サポートチーム，院内コーディネーター，事務部門，倫理委員会，虐待防止委員会，など

### MUST!

1. 主治医の負担が大きくなるように配慮する。
2. 患者・家族ケアチームを設置する。
3. 臓器提供サポートチームを設置する。
4. 患者情報を共有する。
5. 虐待対応に関する院内体制を確認する。

現在，小児の臓器提供事例は，小児の脳死診断や臓器提供の経験がない施設での対応がほとんどであり，患者となる子どもの治療から臓器提供に移行する時期は，「臓器提供を希望する」という家族の意思に基づいて管理が進められる。子どもの治療と臓器保護のための管理が混在することになり，それらと同じチームで担当すると混乱をきたすため，チームを分けて対応するとよい。患者の治療を主に行う「医療ケアチーム」，子ども・家族に寄り添う「患者・家族ケアチーム」，臓器提供に必要な患者管理や検査・手続きを進める「臓器提供サポートチーム」が連携して機能できれば理想的であろう。

小児の臓器提供は基本的に成人と同様の手順によって進められるが，院内体制のあり方は施設によってさまざまであろう。ここでは，小児の臓器提供における基本的な考え方や代表的な体制について述べる。

### 1 主治医の負担が大きくなるように配慮する

- 主治医が子どもの治療に専念できる体制の整備が必要である。
- 「脳死」あるいは「脳死とされうる状態」と判断し，治療の限界を正確に家族へ説明することは，主治医の大きな責務である。その説明は決して拙速に進めることなく，家族が主治医の説明内容を正しく理解できているかどうかを確認するなど，患者・家族ケアチームと協同して対応する。
- 説明は繰り返し行いながら，病状の正確な情報を家族と共有し，終末期医療の選択肢の一つとして臓器提供の機会があることを紹介してもよい。

- ☑ 臓器提供の意思が確認できた場合、子どもの治療に引き続いて、臓器保護を目的とした患者管理も主治医が行うことは大きな負担となる。そのため、可能であれば臓器提供サポートチームが患者管理を行うとよい。

## 2 患者・家族ケアチームを設置する

- ☑ 急性期重症患者を対象とした患者・家族ケアチームの配置が必要である。
- ☑ 早期から患者=子どもとその家族のケアを開始することで、家族の病状の理解を助け、子どもにとって最善の治療を行うことを目指していく。
- ☑ 小児患者の特殊性に注意してケアを展開する。
- ☑ 患者・家族ケアチームで得られた情報は、適宜医療ケアチーム、臓器提供サポートチームと共有する。
- ☑ 患者・家族ケアチームのメンバーは、医師（とくに小児科医）、看護師、臨床心理士、院内コーディネーター、MSWなどで構成するとよい。

## 3 臓器提供サポートチームを設置する

- ☑ 臓器提供サポートチームは、集中治療医、小児科医、院内コーディネーター、事務部門などで構成するとよい。
- ☑ 臓器提供サポートチームは、臓器提供の実施にむけた患者管理や院内対応に専念する。
- ☑ 集中治療医は患者の全身管理を担当し、主治医やメディカルコンサルタント（MC）と連携をとりながら安定化に努める。
- ☑ 事務部門は院内コーディネーターと適宜連携し、各種委員会の開催や法的脳死判定の時間調整、臓器摘出を行う場合には摘出チーム迎え入れの折衝やスケジュール管理を行う。
- ☑ 法的脳死判定の脳波検査、血液ガス分析検査、各種検査など、オーダー入力を分担することもできる。

## 4 患者情報を共有する

- ☑ 子どもや家族に関する情報は窓口を一本化し、諸機関との情報共有（児童相談所など）は適宜、電話や書面を使用して行う。
- ☑ 子どもの個人情報管理に配慮が必要である。カルテアクセスに履歴をつけたり、キーロックを設けるなど、十分な対応が求められる。

## 5 虐待対応に関する院内体制を確認する

- ☑ 小児から臓器提供を行う施設に必要な体制が『臓器の移植に関する法律』の運用に関する指針（ガイドライン）に定められており、以下に示す体制がない場合は当該施設において小児から

**パブリックコメント募集公開用  
複写・引用・転載・頒布 厳禁**

の脳死下臓器提供を行うことはできない。

- ▶▶ 虐待防止委員会等の虐待を受けた児童への対応のために必要な院内体制が整備されていること。
- ▶▶ 児童虐待の対応に関するマニュアル等が整備されていること。なお、当該マニュアルは、新たな知見の集積により更新される必要があること。

### TIPS!

- 小児例は、乳幼児期、学童期、青年期などの成長段階や家族背景といった多様な因子の影響を考えなくてはならないため、影響因子の多様性が高く、チームによる多角的なアプローチが必須である。このため、小児診療科との連携を密にし、患者の特性に応じたケアを実践することが重要である。

気をつけよう!